

親の教育意識と就学前の教育環境



野 垣 義 行

一、問題の概観と研究の目的

最近とみに幼児教育の重要性が認識され、家庭や幼稚園での教育を改めて見直そうとする気運が高まっているが、幼児教育に関心を持っている私たちにとって真に望ましいことだといえる。

幼児は年令とともにその生活圏、生活の場を拡大していくが、精神的な意味では勿論のこと、時間的にも空間的にも彼らの生活の中心は家庭に、両親特に母親を中心とした家族にあるといえる。一方幼児期は人間の一生において最も可塑性に富む時期であり、したがって成長の最も著しい時期である。心理学者の研究によると、パーソナリティの基盤はこの幼児期に形成されることであるが、このことはいかにこの時期が重要であるかを物語っているといえる。

小論は人間形成の場としての家庭の重要性の認識のもとに、そこで行なわれている教育の実態を明らかにしようとする意図のもとに

行なった『新入学児の家庭環境及び父兄の教育意識の調査』の結果の一部である。わが国の教育に見られる進学熱、受験準備体制の背後には、国民一般の学歴に対する高い志向がうかがえるが、この調査は、親の学歴志向が子どもに投射されて教育期待になるという考え方に立って、そうした教育期待、特にそれと関係する就学前の教育の地域差を明らかにしようとしている。

教育意識を規定する要因としては種々なるものが考えられるが、一般的には学歴、職業、収入といった社会的階層を決定する要因によって規定されているといえる。教育意識がこれらの階層的要因と深く結びついているということはこれまでの研究に明らかである。本研究は教育意識の階層差を明らかにすることもそのねらいの一つであるが、それに止まらず教育意識の地域差を明らかにすることを大きなねらいとしている。即ち、地域の教育的文化的環境ないしは流行といったものの差、あるいは制度的なものの持つ意味の地域によ

る受け止め方の違いなどによって、教育意識の現われ方に差が認められるのではないかとということが本研究の仮説となっている。

一般に附小へ子どもをやっている親の教育意識及びそれと密接な関係にある教育環境は公立小へ子どもをやっている親のそれよりも高いといわれている。本調査はこの両者間の意識及び環境の差の程度や方向を明らかにすることを意図している。また附小は多くの問題ををはらんでいるといわれている。広島市の場合、附小を指しての競争が激しく、幼稚園そのものが附小受験のための準備教育機関の観さえ呈しているが、この現実には親の教育意識に反映しないではおかないであろう。あるいは逆に、親の激しい競争志向的態度が幼稚園時代からの激しい競争を惹起したといった方が正鵠を得ているかもしれない。幼稚園では「読み・書き・計算」といった知的教育、受験の技術的指導が見られ、幼稚園本来の使命からは大きく離れた教育が行なわれており、このことは家庭教育のあり方にも結果している。幼稚園や家庭での教育が学校教育の先走りをしていものなのか、それとも就学前教育には独自の教育的使命があるのではないか、というようなことについては深い反省をしてみる必要がある。ありがいにはいい切れないが、本調査はかかる考察のための資料を提供しようとするものである。

二、調査の手續と対象

①調査期日 昭和39年5月

第1表 調査対象及び回収率

調査対象校	配布数	回収数	回収率
附小 A (国立・広島)	85	84	98.8%
附小 B (国立・広島)	87	84	96.6
附小 C (国立・山口)	80	79	98.8
附小 D (国立・松江)	80	78	97.5
附小 E (私立・広島)	91	68	74.7
公立小 F (広島)	159	146	91.8
公立小 G (広島)	120	91	75.8
公立小 H (広島)	125	118	94.4
公立小 I (広島)	80	65	81.3

②調査方法 質問紙法

③調査対象 昭和39年度入学児の親(調査対象校と質問紙の回収率は第1表の通りである)

調査対象の職業・学歴構成は第2表に示した通りである。附小と公立小の間にはかなりの差が見られ、附小は家庭環境その他の点においてかなりレベルが高いといえるが、附小間にあつては地域における階層差はほとんど認められない。(但し収入の面では多少の差が見られた) 多少問題は残ると思うが、三市の附小間に認められた差

第2表 職業及び父親の学歴構成

	専門	管理	事務	販売	熟練	半熟練	非熟練	無職	不明	小・高小 新中卒	旧中高卒	専大卒	その他	不明	計
附小 A・B	38	63	42	16	3	3	0	1	2	5	68	88	4	3	168
附小 C	20	12	36	9	1	0	0	1	0	1	31	47	0	0	79
附小 D	25	21	22	7	2	1	0	0	0	2	28	45	2	1	78
附小 E	17	11	17	18	4	0	1	0	0	3	36	25	2	2	68
公立小 F・G・H・I	25	61	137	75	28	69	10	3	12	117	186	80	13	24	420

は階層差を一応ネグレクトして地域差としておさえた。このようにいい切ることはいい過ぎかもしれないが、少なくとも職業とか学歴とかいった階層規定要因を分析基準にした場合差が見られず、地域を分析基準にした場合差が見られるならば、その差を地域差としておさえることは許されるであろう。

三、結果の分析

1 親の教育意識

親はわが子にいろんなことを期待している。そしてその実現を願う。そのためにいろんな犠牲を払い日々努力しているというのが総ての親に共通する生活態度であろう。この親の子への期待は次元を教育という面に限れば、わが子がどんな人間になってほしいか、どこまで進学させたいか、といったことに焦点づけられると思う。したがって親が子に期待する理想的人間像、子への進学期待といった問題が大きくクローズアップされる。そこでまず、競争とか学歴とかいったことに関して、親はわが子にどんな期待を有しているか、また親自身どんな態度を示しているか、といったことから問題にしてみたい。

将来わが子がどんな人間になってほしいかという質問に対して「はげしい競争に打ち勝って人の上に立つ人間になってほしい。」というように、子に競争的態度を期待している親が広島では28%もいるのに山口では15%、松江では14%と少なくなっている。親自身

「人生は競争だ。他人との競争に打ち勝っていかなければ何もできない。」というように、極めて競争志向的な意識を持っている者が広島で36%、山口で15%、松江で18%となっている。またわが子を「是非一流大学へ行かせたい。」というように、学歴に対して極めて強い志向を示す親は広島で29%、山口で20%、松江で10%となっており、親自身「無理をしても大学は出ておいた方がよい。」と考えている者が広島で52%、山口で51%、松江で42%もいる。このように広島は親は子への期待においても親自身の態度においても山口・松江の親よりも競争・学歴志向的であるといえ、生存競争的価値態度に地域差のあることがはっきりと認められる。このことは広島市に見られる幼稚園時代からの進学準備教育の激しさ、全国で一、二を争う学習塾ブーム、全国第二位の高校進学率などを反映していると考えられ、地域の教育的文化的環境ないしは流行といったものが、親の教育意識をいかに強く規定しているかを物語っている。

これを学歴別に見ると、旧制中学・新制高校卒の学歴を持つ者に競争・学歴志向的態度を示す者が多い。はじめ、高学歴者ほど競争・学歴志向的であろうと予想していたのであるがこれは当らなかつた。これは大学卒の学歴を持つ者がその学歴のおかげで、あくせくと競争することをおとしないポストを占めているためとも考えられるが、悪く解釈すれば一種のタテマ意識の現われともいえる。旧中・新高卒者に学歴志向的態度を示す者が多いということは、彼らに「大学さえでていれば」といった切実な願望があり、職場とか

いろいろな面において学歴で損をしているという意識が強いためとみられる。一方小・新卒者はそれほど学歴志向的ではないが、これは大学が自己の学歴よりもはるかに高いので、ある種の諦感を伴って旧中・新高卒者ほど切実に要求しないためであろう。

附・公別では附小がより競争・学歴志向的であるが、このことは附小を高い学歴期待を実現させるより有利な出発点と見なし、極めて競争率の高い附小を志向したということから十分理解できるであろう。

親の子への学歴期待は、親の子への進学期待に集中的に投射されていると考えられるので、次にこの進学期待を問題にしよう。(第3表)

第3表 子への進学期待

		男 子						女 子					
		大学院	大学	短大	高校	D.K.	計	大学院	大学	短大	高校	D.K.	計
学歴別	大学院卒	42.9	55.8	0	0	1.3	100.0	4.1	74.0	20.5	0	1.4	100.0
	高専・短大卒	19.2	76.6	0	0	4.2	100.0	1.9	73.6	18.8	3.8	1.9	100.0
	旧中・新高卒	10.2	81.0	6.9	0	2.2	100.0	1.3	49.7	34.8	11.6	2.6	100.0
	小・高小卒	3.8	67.9	11.3	15.1	1.9	100.0	1.9	20.8	37.7	39.6	0	100.0
附・公別	附小 A・B	36.0	61.4	1.3	0	1.3	100.0	5.2	76.6	14.3	2.6	1.3	100.0
	公立小 F・G・H・I	8.0	73.5	9.3	5.5	3.7	100.0	2.2	33.5	38.4	23.2	2.7	100.0

している親は、男の子に対して96%もの者が大学以上の学歴を期待している。中卒者で91%、小卒者で72%と親の学歴が下るにつれて大学以上の学歴を期待する者はやや減少しているが、それでも進学期待を大学以上とする者は極めて多く、男子には大学をというのが一般的傾向とみなされるが、これは学歴偏重の時代的風潮を反映しているといえる。女子にあっても男子と同様の傾向が指摘されるが、進学期待は男子に比して低学歴の方に傾斜しているといえる。このことはほとんどの女子が将来家庭に入り男子ほど学歴を必要としないことを考えればむしろ当然であろう。

次にこの進学期待を附・公の別とクロスさせてみると、男女ともに附小の方が有意に進学期待が高いといえる。附小において特徴的なことは、男子にあつては大学院を、女子にあつては大学を期待する者が多いということである。附小と公立小とのこのような顕著な差は親の学歴の反映であるとともに高い学歴を期待して附小へ入学させたという事実を裏書きしている。

なお地域別では三市間にそれほどの差は認められなかった。このことは進学期待を規定する要因としては地域差よりも学歴などの階層差の方が強いことを物語るものであろう。

次に学歴に対する親の考え方を別の角度から取りあげてみる。被調査者に「今の日本の社会ではどんな人が出世しやすいとお考えですか。」と尋ね、才能・努力・幸運・人柄・学歴・家柄・財産・父の社会的地位・縁故関係の9つの要因に順位をつけさせた。その結

果を見ると「學歷」は9つの要因中第3位にランクされており、「能才」「努力」に次いで重視されていることが知られる。

この社会的成功の条件の順位づけを地域別に見ると、三市間にわずかのズレはあったが、才能・努力に次いで「學歷」を重視し、家柄・財産が最後にくるという傾向は総て同一で、學歷はどの地域においても第3位にランクされたのである。このように學歷は出世の要因として極めて高く評価されているのであるが、このことは學歷が万能でないにしても、今日の如き開かれた社会では學歷があれば何とかなるといった考え方、中産階級が増大し、彼らにとって子に残すほどの財産もなく、また家門といったものもかつてほどの威力を発揮しない大衆社会的状況にあつては、學歷が最も手とり早い

第4表 在 園 年 数

		地 域 別			学 歴 別			職 業 別					附・公別	
		廣 島	山 口	松 江	小	中	大	専 門	管 理	事 務	販 売	熟練 非熟練	附 小	公 立 小
3	年	23.2%	10.1	11.5	20.3	20.1	15.1	16.8	20.2	11.8	28.8	18.1	23.2	18.1
2	年	66.1	59.5	56.4	41.4	55.3	66.3	62.4	62.5	59.1	53.6	45.1	66.1	49.8
1	年	10.1	29.1	29.5	30.5	22.3	16.1	18.4	16.1	26.0	13.6	32.0	10.1	27.4
D. K.		0.6	1.3	2.6	7.8	2.3	2.5	2.4	1.2	3.1	4.0	4.8	0.6	4.7
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出世の手段であることを考えればむしろ当然の結果であろう。

2 就学前の教育環境

以上主として教育に関する意識の面を學歷期待を中心に眺めてきたのであるが、次にその意識に支えられた実態を、子どもがはぐまれてきた教育環境に焦点を合わせてとりあげてみたい。

まず在園年数から問題にしよう。第4表は在園年数を地域別・學歷別・職業別・附・公別に示したものである。ここで在園年数を問題としたのは、在園年数の長短が親の幼稚園教育への期待ないしは親が幼稚園をどのように評価しているかを知るある種のメルクマールとなると考えたからである。親がわが子を長期間幼稚園へやるということの背後には、それを可能とする経済的基盤が必要であることとはいうまでもないが、それ以上に親が幼稚園教育の必要性を認め、その意義を高く評価していることを物語るものと思われる。

第4表を一見して明らかなように、在園年数が二年という者が半数以上を占め、幼稚園は二年というのが一般的傾向である。これを地域別に見ると、広島は山口・松江に比して在園年数の長い者が多い。學歷別では親の學歷が高くなるほど、職業別では専門・管理といった知的職業従事者の子どもほど、また附・公別では附小の方がそれぞれ在園年数が長くなっている。このような結果を生みだした原因として経済的な問題も無視できないと思うが、それにもまして幼稚園に対する親の期待の差、地域の教育的文化的環境の差といったものが作用しているように思える。

第5表 読み・書き・計算の能力

		地 域 別			学 歴 別			職 業 別					附・公別	
		広島	山口	松江	小	中	大	専門	管理	事務	販売	熟練 半非熟練	附小	公立小
読 み ・ 書 き	カタカナもひらかなも自由に読み書きできた	20.2	13.9	16.7	6.3	12.9	19.3	21.6	17.3	13.4	14.4	3.3	20.2	9.5
	ひらかなだけ自由に読み・書きできた	51.8	49.4	42.3	27.3	45.0	43.6	40.0	48.2	43.3	41.6	26.2	51.8	36.4
	ひらかなは全部読めたがなかには書けない字もあった	24.4	25.3	34.6	39.8	31.5	29.5	32.0	23.8	34.3	31.2	42.7	24.4	34.8
	ひらかなはたいてい読めたが書くのは自分の名前ていど	1.8	7.6	6.4	12.5	6.9	5.6	4.8	6.5	7.1	7.2	13.9	1.8	11.0
	読み・書きはあまりできなかった	1.2	2.5	0	12.5	3.1	1.0	1.6	2.4	1.5	3.2	13.1	1.2	6.7
計 算	数字は100まで書け、その計算ができた	41.1	26.6	28.2	15.6	29.2	31.9	37.6	30.9	28.3	24.8	14.8	41.1	20.7
	数字は50まで書け、その計算ができた	25.6	13.9	19.2	14.8	18.6	19.7	16.0	20.2	20.5	17.6	17.2	25.6	17.9
	数字は20まで書け、その計算ができた	22.0	24.1	25.6	28.9	24.1	27.7	25.6	28.6	24.0	26.4	26.2	22.0	27.2
	数字は10まで書け、その計算ができた	9.5	31.6	24.4	30.5	21.2	17.5	19.2	16.1	12.1	320.0	32.0	9.5	23.8
	数字を書いたり計算をしたりすることはほとんどできなかった	0	2.5	0	5.5	3.2	1.4	0.8	1.8	2.4	4.8	6.5	0	5.2

在園年数の差は単なる年数の差に止まらないで幼稚園教育のあり方に影響している。幼稚園で「読み・書き・計算」を教えてくれなかったと答えた者の割合を見ると、広島24%、山口49%、松江32%といった具合で、在園年数の長い広島では文字の教育がかなり行なわれていることが知られる。このように子どもへの知的教育や進学準備教育は、広島では早くからはじめられているのであって、小学校入学時における「読み・書き・計算の能力」には三市間に相当の開きがある。(第5表) 学歴別、職業別、附・公別にも相当の差が認められ、親の学歴が高く知的職業に従事しているというように、知的雰囲気を感じられる家庭に育ち、一方では在園年数も長く知的な刺激を受ける機会が多い場合には、その能力も高くなるといえるのである。なお文字や数字に興味を示すようになった時期についてみると、一般に四〜五才に関心をいだくようになることが知られたが、ここでも家庭の知的教育的雰囲気の重要性が指摘できる。

次にテレビの視聴時間について見よう。視聴時間は一日平均二〜三時間というのが圧倒的で、その内容はマンガを中心とした子ども向けの番組がほとんどである。そこで視聴時間が二時間未満の者とそれ以上の者とに二分して比較すると、学歴別、職業別、附公別に関連が見られた。親の学歴が高いほど、知的職業従事者ほど子どものテレビ視聴時間は短くなっており、彼らの教育的配慮の高さ、統制の厳しさを物語っている。附・公別では附小の方が視聴時間が短い、これは附小の親は公立小の親よりも学歴が高く、また知的

第6表 け い こ こ と

	地 域 別			学 歴 別			職 業 別					附・公別	
	広 島	山 口	松 江	小	中	大	専 門	管 理	事 務	販 売	熟練 半熟練	附 小	公立小
し た	89.3%	78.5	65.4	30.5	62.2	79.7	78.4	76.2	62.6	62.4	32.8	89.3	45.0
しない	10.7	20.3	34.6	61.7	35.5	19.6	21.6	22.0	34.3	34.4	62.3	10.7	50.2
D. K.	0	1.2	0	7.8	2.3	0.7	0	1.8	3.1	3.2	4.9	0	4.8
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

職業に従事している者が多いことにもよるが、一方では附小へ行っている子どもは幼稚園時代けいこごとをする者が多く、更には附小受験の準備に忙がしくてテレビを長時間見る余裕がなかったことも若干の理由をなしていると思われる。なおテレビの視聴時間に関しては地域差は認められなかった。

幼稚園時代にピアノとか習字・図画といったけいこごとをした者の割合を見ると第6表の通りである。地域別では広島―山口―松江間に有意差が認められ、広島にけいこごとをした者の割合が高い。またこれを学歴別、職業別、附・公別に見ると、学歴が高いほど、知的職業ほど、附小ほどけいこごとをしたという者が多く、けいこごとに対する教育的関心の高さがうかがえる。またそのけいこごとの数について見ると、二つ以上のけいこごとをしたという者は、広島51%、山口24%、松江14%という割合で三市間に有意差が

認められた。学歴別では学歴が高くなるほど、職業別では管理・販売といった比較的に金銭に恵まれている層に二つ以上けいこごとをしたという者の割合が高くなっている。

次にそのけいこごとに費した金額について見ると、千円以上という者が広島で57%、山口で29%、松江で22%である。これはけいこごとの数と密接に関係しており、多くけいこごとをしている広島でそれに費す金額も大きいということは当然とはいえ、広島では親の負担する教育費の高いことが知られる。親は子どもに何か習わせてやりたいと思っても、経済的余裕がなければ習わせてやれないというように、けいこごとには大きな経済的負担が伴うので、これを収入別に見ると、収入が多いほどけいこごとをさせる率が高くなっており、階層的要因が強く作用していることが知られるが、広島にあっては十人の内九人までがけいこごとをしているということは、地域のムード的なものもまた大きく影響していることがうかがえる。

次に附小受験のための準備教育について見よう。子どもの幸福のためにはなんとか一流会社へ、そのためには有名大学へ、またそのためには有名高校へというわけで、有名高校への異常なまでの集中は、今日では別に特異な現象でなくごくありふれたこととなっている。しかもその集中現象が高校から中学校へ、そして小学校へ、ついには幼稚園へと下降しているのが今日の状況である。子どもたちは将来の幸福という美名のもとに既に幼稚園時代から知能テスト、模擬テストというように毎日テストに追いまわされているのである。

第8表 附小のための準備教育

	した	しない	D.K.	計
広島	92.9	5.9	1.2	100.0
山口	60.8	39.2	0	100.0
松江	20.5	78.2	1.3	100.0

かもしれない。

が当らなかつた。この結果は親の本音でなく
タテマ意識の現われとみた方が当たっている
第一位で、より行きとどいた教育を志向して
いることが知られる。はじめ「上級学校への
進学に有利であるから。」という理由を指摘す
る者が相当いるのではないかと予想していた

親がわが子を附小へやろうと考える場合、それにはいろんな理由
があるであろう。附小受験の理由について見ると(第7表)、「附小
は先生が立派で設備がよく整っているから。」ということが三市とも

第7表 附小受験の理由

理 由	広島	山口	松江
子どもが行きたがったから	7.1%	8.9	14.1
中学あるいは高校までエスカ レータ式に行けるから	2.3	0	0
附小は先生が立派でまた設備 がよくととのっているから	44.7	43.1	34.6
附中あるいは附高からの進学 率がいいから	8.4	2.5	1.3
父や母あるいは兄や姉が附小 を卒業、現に行っているから	5.4	18.9	23.0
幼稚園の先生、親類や近所の 人にすすめられたから	10.7	1.2	2.6
学区の小学校の評判があまり よくないから	3.6	8.9	2.6
同じようなレベルの子ども と学べるから	10.1	5.1	7.7
そ の 他	5.4	8.9	14.1
D. K.	2.3	2.5	0
計	100.0	100.0	100.0

第9表 進学準備教育の形態

	家で	幼稚園	受験で	家庭教師	模テ	擬スト
広島	48.1	82.7	15.4	3.2		49.4
山口	52.1	64.6	0	0		10.4
松江	93.8	31.3	0	6.3		6.3

「家で」と答えた者についてその準備教育の
内容についてみると、三市間に相当の開きが
ある。山口、松江では市販のメンタルテスト

受験準備をしたと答えた者にどんな形でしたかと尋ねてみると
(第9表)、「家で」というのが三市を通じて約半数以上を占め、家
庭内で進学準備教育が行なわれていることが知られる。しかし広島
では「家で」と答えた者が48%と他の二市に比較して少なく、しか

附小受験のための準備教育を何らかの形で行なった者を比較して
みると(第8表)、広島―山口―松江間にはつきりと有意差が認め
られた。(もっとも松江では附小の下に附属幼稚園があるというこ
とが作用している)このように広島にあっては受験準備をしたとい
う者の割合が極めて高いが、これは広島市では附小は附高にまでつ
ながっており、またその附高の一流大への進学率が高いというよう
に、進学に役立つルートが開かれているために、高い進学期待を実
現しようとして多くの者がこれを求め競うということ、そしてその
ためには準備教育が是非とも必要であると考えられていることを物
語っているといえる。

を一冊か二冊、週に一〜二回、一回10〜20分程度というのがほとんどであるのに対し、広島ではメンタルテストの冊数も増え、それ以外に幼稚園や模擬テストでやった問題をくりかえしやるという者が多く、単に量的だけでなく質的にも異なっているといえる。「幼稚園で」受験準備をしたという者が広島では83%もあり、幼稚園そのものが附小のため進学準備教育機関の観さえ呈している。しかしそこで行なわれている教育は広島と山口・松江では相当の差が認められる。例えば、山口・松江では週一回、時間にして20分程度というのが圧倒的であるが、広島では週四〜五回、延べ7〜10時間というのも相当数いる。しかも広島ではその準備がずっと早い時期から行なわれているのであって、両者間の開きは極めて大きいといわなければならない。また内容面に関しても広島では単に知的教育に止まらず受験の技術的指導までなされており質的にも大きな差がある。

広島の場合特徴的なことは、「受験塾」を利用したり「模擬テスト」を受けたという者が相当数いることである。模擬テストを受けたという者は49%と、二人に一人の割合で、またその半数は10回以上もテストを受けており、模擬テストが広く利用されていることが知られる。特に広島市には附小受験のための学習塾があり、その経営が成り立っているということは、広島で附小を目指しての競争がいかにはげしいかを物語るものである。

このような幼稚園時代からの異常なまでの受験準備教育は、幼い子どもたちの心身に何らかの影響を与えないではおかないであろ

第10表 附小の独占率

	7人以上の合計 合格者幼稚園	10人以上の合計 合格者幼稚園	15人以上の合計 合格者幼稚園
幼稚園数	9	6	3
合格者数	100人	79人	46人
合格者に 占める割合	59.5%	47.0%	27.4%

3園あり全合格者の四分の一以上を占めている。受験者数が不明なので各幼稚園の合格率については何ともいえないが、以上の数字から合格者は若干の幼稚園に片よっているといえよう。多くの合格者をだした幼稚園について、そこでの準備教育のあり方について見ると、夏休み冬休みに、試験近くになると日曜日まで園児を集めて準備教育をしており異常なものを感じさせる。親の方も幼稚園のしりをたたいて準備教育を要求することもあるが、附小への合格者を多く出すということはその幼稚園の地位を高めることでもあり、また多くの入園希望者が集まるということと相まって、若干の

う。実に大きな教育問題である。

広島にあっては幼稚園が受験準備教育において極めて大きな役割を担っていることにふれたが、最後に附小の独占率とでもいうものにふれてみる。(第10表) 附小入学児一六八名中市内の幼稚園から合格した者は一三九名で(市内の幼稚園51園中合格者を出した幼稚園27、ださなかつた幼稚園24)、他は保育所とか市外からの合格者である。合格者をだした27の幼稚園中7名以上の合格者をだした幼稚園が9園あり、全合格者の半数以上を占めている。枠を狭めて15名以上合格者をだした幼稚園を見ると

幼稚園では極端ない方をすれば幼稚園本来の姿からほど遠い教育がなされているといえる。このことは幼稚園だけの問題でなく家庭教育のあり方にも影響しており、就学前の教育に大きな問題を投げかけているといえる。

四、要約と今後の課題

親の教育意識と就学前の教育環境を地域差と階層差に焦点を合わせて考察してきたが、そこにはいろんな問題が残されている。地域差ということと前面におしだしたのであるが、そこに見られた差がはたして純粹な意味で地域差といえるかはなほ疑問である。階層的規定要因と地域的規定要因との関係、特に後者のより深い分析を待たなければ、現われた差を階層差に起因すると見なすか、地域差に起因すると見なすか何ともいえない。本研究では三市の附小が階層的に類似しているのでそこに見られる差を一応地域差としておさえたが、この方法は多くの批判を受けるであろう。またサンプリングの問題もある。公立小を広島からのみ抽出したので、山口・松江に關しては附小と公立小を比較することができなかった。その他欠損家庭や共稼ぎ家庭の親と一般の家庭の親との意識の違いなど、とりあげたい問題がたくさんあったがそこまではできなかった。このようにこの調査は不備な点を多くはらんでおり、また集計が完了していないものも相当あるので、最終的な結論をいう段階ではないが、本報告に關しては一応次のように要約できるのである。

①競争・學歷志向的態度には地域差が認められる。広島は山口・

松江に比して競争・學歷志向的であるといえ、地域の教育的文化的環境・流行を反映しているといえる。

②學歷が高いほど競争・學歷志向的であるとはいちがいえない。むしろ學歷において劣等感を持っていると考えられる旧中・新高卒者において競争・學歷志向的である。

③職業間に差が見られ、管理的職業従事者において最も競争・學歷志向的である。

④附小と、立との間に差があり、附小の方が競争・學歷志向的である。

⑤男女間に差があり、親は男の子により競争・學歷志向的態度を期待している。

⑥親の學歷と子への進學期待との間には極めて密接な關係があり、親の學歷が高いほど子への進學期待も高く、しかも自分の學歷よりも一段上の學歷を子に期待している。

⑦出世の要因として學歷は高く評價されている。

⑧就学前の教育環境には階層差とともに地域差も認められる。例えば、在園年数とかけいこごとの有無などに地域差は顕著である。

⑨附小のための進學準備教育にもつきりと地域差が認められ、広島では山口・松江に比してより密度の高い準備教育がなされている。

⑩広島市の場合、附小合格者は若干の幼稚園に片よっており、ここでの準備教育は激しく幼稚園教育のあり方に大きな問題を投げかけている。

(広島県立保育専門学校)